

# アメリカ文化史におけるアプトン・シンクレアの 「ヘリコン・ホーム・コロニー」

中 島 祥 子

- I はじめに
- II 「コミュニン」とは何か
- III アメリカにおける「コミュニン」の意義
- IV アメリカに見られるさまざまな「コミュニン」の例
- V ヘリコン・ホーム・コロニー
- VI おわりに

## I はじめに

アプトン・シンクレア (Upton Sinclair, 1878-1968) がマックレイカーとしてその名をアメリカ文学史に留めることになった作品『ジャングル』(*The Jungle*, 1906) は、革新主義時代 (Progressive Era) と呼ばれる 20 世紀初頭のシカゴにリトアニアから移民してきた青年ユルギス・ルドウクス (Jurgis Rudkus) とその家族を中心とした物語である。

若さとエネルギーに満ちあふれるユルギスは家族とともに祖国を去り、豊かな生活と自由をもとめて「機会のある国」(Land of Opportunity) アメリカへやって来た。当時よくあったように、自分たちより先に移民してきている同郷の人や、知り合いを頼りにシカゴへたどり着いたユルギスは、妻オウナ (Ona) の身内ヨナス (Jonas) の友人が金持ちになったというストックヤードの中の屠畜場に職を得る。ストックヤードについては「健康を害したらどんな目に遭うかわからない場所」<sup>1)</sup> だという「身の毛もよだつ話」<sup>1)</sup> を噂としてさんざん聞かされていたが、ユルギスは家族を養いながら、アメリカでの生活に希望を見いだしていく。

ユルギスは汗水流して 1 日およそ 1 ドル 50 セントという賃金を稼いだ。こ

れは、アメリカにやってきたばかりの移民が1週間に7ドルあれば生活できたという事実<sup>2)</sup>や、移民してきたばかりであろうと、すでにアメリカ市民になっていようと、1人の女性が朝から晩まで1日中床磨きをしても数セントしか稼げなかったという事実<sup>3)</sup>を考慮に入れると、畜殺されたばかりの動物の「湯気たつ熱い血の海が床一面に流れる」<sup>4)</sup>中で働かなければならない重労働とはいえ、比較的良好賃金であったと言えよう。

しかしユルギスが就労中に怪我を負い、職を失ってしまうところから一家の運命が狂い始める。それこそ、「身の毛もよだつ話」<sup>1)</sup>が現実となってしまったのだ。実父は過酷な労働のために命を落とし、妻オウナは肉体的にも精神的にも病んでいる状態で2人目の子どもを出産しようとするが、貧しさのために助産婦や医師を呼ぶことができず、適切な処置がされないままに亡くなってしまう。オウナが亡くなった後、ユルギスは1人目の息子だけを心の支えに生きていたが、その息子をも不慮の事故によって失ってしまう。

絶望の淵に立たされたユルギスは生きる意味を失い、あてもなく街路をさまよう浮浪者に身を落とすが、そんなユルギスの前に突如、社会主義思想がまるで救いの神のごとく現れる。偶然足を踏み入れた集会場で、社会主義者の集会が催されていたのだ。そこで行われていた演説に心動かされたユルギスは社会主義に傾倒し、人生が希望の持てるものになっていく。物語は社会主義実現の可能性を示唆するかのような演説で、次のように締めくくられている。

連中にできることといえば、アメリカの社会主義に初めて訪れた最大の機会を、シカゴの我が党に与えることだけだ…誰にも止められない奔流が始まる。それは満潮になるまで変わることのない潮流だ。誰も抵抗することができない、圧倒的な勢いの潮流だ。虐げられたシカゴの労働者たちを、我々の旗印の下に結集させる潮流なのだ！その労働者たちを我々は勝利のために組織し、教練し、配備する！我々は反対する勢力を制圧し、我々の目の前から一掃する！そしてシカゴは我々の手に落ちる！シカゴは我々の手に落ちる！シカゴは我々の手に落ちるのだ！<sup>5)</sup>

この作品がきっかけとなり、「純正食品・薬品法」(Pure Food and Drug Act, 1906)と「食肉検査法」(Meat Inspection Act, 1906)が制定されたことは広く知られているが、シンクレア自身は『ジャングル』について、「読者の心臓を狙ったが、胃袋にあたってしまった」<sup>6)</sup>と、自身の期待とは別の観点で作品が評価されてしまったと述べている。

それでもこの作品によって法律が施行されるほどの衝撃を与えたことは確かだった。しかし、シンクレアがこの作品で最も主張したかったのは、上に引いたように、ユルギスのような経済的、社会的立場に置かれた人々を救うと考えられる社会主義なのだ。その意味で『ジャングル』は「社会改革の作品」<sup>7)</sup>であった。

シンクレアは『ジャングル』を発表したその年の10月、ベストセラーとなったこの作品の印税30,000ドルを投資して、ニュージャージー州エングルウッド(Englewood, New Jersey)に「ヘリコン・ホーム・コロニー」(Helicon Home Colony)という共同生活組織を開設する。『ジャングル』で社会主義を標榜したシンクレアによる組織となれば、それは生産手段の社会的所有を土台とし、「共有共産」を前提とするものだろうと捉えても不思議なことではない。だが、シンクレア自身はこの組織に関して「共有共産」という言葉は一切用いていない。

「ヘリコン・ホール」(Helicon Hall)とも呼んだ、この組織について『自叙伝』(*The Autobiography of Upton Sinclair*, 1962)の「ユートピア」(Utopia)という章では、次のように述べている。

彼の計画は、共同宿泊所を設立して、その実行可能性とそれがもたらすより大きな機会を立証することだった。この考えには革命的なものではなく、アメリカの多くの地域で実践されてきたことだ。ただみんな自分たちが何をしているのか認識しないままに実践しているだけなのだ。アディロンダック山脈のあたりにあるクラブのようなものだ。土地を共同で所有して、個々に小さな建物を建てるか、クラブからそれを賃借り

し、共同の台所と食堂があるのだ。あらゆるクラブがそうであるように、平等と民主主義に基づいて、各自がそれぞれの業務を運営していくのである。<sup>8)</sup>

また、『ブラス・チェック』(*The Brass Check*, 1919) の第 11 章では次のように記している。

私は進歩的な考えを持つ人びとが集まり、ホーム・クラブと呼ばれるもの、すなわち宿泊人が所有し、経営するホテルを設立しようと提案した。この考えには、格別に急進的なところなどどこにもなかった。<sup>9)</sup>

決して急進的な考えではないということを強調し、さらに自身が目指すものはクラブやホテルのようなものであると述べている。後述するが、シンクレアは当時盛んに設けられたカントリー・クラブのようなものを考えていたのではないだろうか。

だが、これまで出版されてきている辞典、たとえば社会学者でコミュニオン研究家のロバート・S・フォウガティ (Robert S. Fogarty, 1938-) の『アメリカのコミュニオン・ユートピア歴史辞典』(*Dictionary of American Communal and Utopian History*, 1980)、アメリカの作家で歴史家のフォスター・ストックウェル (Foster Stockwell, 1929-) の『1663 年から 1963 年までのアメリカのコミュニオン百科事典』(*Encyclopedia of American Communes, 1663-1963*, 1998)、オーストラリアのラトロブ大学の特別研究員で社会学者であるリチャード・C・S・トラヘア (Richard C. S. Trahair) の『ユートピアと空想的社会改良家—歴史的辞典』(*Utopia and Utopians: An [sic] Historical Dictionary*, 1999)、歴史学者のロバート・P・サットン (Robert P. Sutton) の『現代のアメリカのコミュニオン—辞典』(*Modern American Communes: A Dictionary*, 2005) では、「ヘリコン・ホーム・コロニー」が、アメリカ文学史において『緋文字』(*The Scarlet Letter*, 1850) を代表作品として遺したナ

サニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne, 1804-64) が参加した「ブルック・ファーム」(Brook Farm) と共に「コミューン」(commune) として紹介されているのだ。しかし、シンクレア自身は「コミューン」という言葉を決して用いてはいない。それにもかかわらずなぜ「コミューン」としての括りのなかに入れられているのだろうか。

後述するが、それはユートピアと「コミューン」とがほぼ同義で用いられることが多いからかもしれない。だが、マックレイカーとして、その地位をアメリカ文学はもとより文化史においても築き上げたシンクレアが社会改革を意識していなかったということはないだろう。過去における「コミューン」の歴史をたどるとき、「ブルック・ファーム」をはじめとして多くの「コミューン」が儚い生命力しか持たなかった。そのような理想的共同体とは異なった共同生活を構築し、シンクレアならではの社会改革の一端を明示することを目指していたのではないか。本稿ではこの点を確かめておきたい。

#### 【註】

- 1) Upton Sinclair, *The Jungle*. (1906. New York : W. W. Norton & Company, Inc., 2003), p. 23.
- 2) Alfred Fried, *The Rise and Fall of the Jewish Gangster in America*. (New York : Holt, Rhinehart and Winston, 1980), p. 7.
- 3) Alfred Fried, *op.cit.*, p. 8. 『ジャングル』では、缶詰のカンに色を塗る仕事は熟練を要するため、女性であっても1日あたり2ドルという、ユルギスより高賃金を稼いだとされている。特殊技術を身につけていればそれなりの報酬はあったようだ。
- 4) Upton Sinclair, *op.cit.*, p. 43.
- 5) Upton Sinclair, *op.cit.*, p. 328.
- 6) Upton Sinclair, *The Autobiography of Upton Sinclair*. (New York : Harcourt, Brace & World, Inc., 1962), p. 126.
- 7) Sacvan Bercovitch, *The Cambridge History of American Literature, Volume Three, Prose Writing, 1860-1920*. (Cambridge : Cambridge University Press, 2005), p. 620.
- 8) Upton Sinclair, *op.cit.*, p. 128. なお、文中の「彼」とはシンクレア自身を指す。シンクレアは『自叙伝』において、1911年に発表されたシンクレアの自伝的作品と言われる『愛の巡礼』(*Love's Pilgrimage*)の主人公サーシス(Thyrsis)の名前で登場しているからである。
- 9) Upton Sinclair, *The Brass Check : A Study of American Journalism*. (California : Published by the author, 1920), p. 62.

## II 「コミューン」とは何か

アメリカの作家で歴史家のフォスター・ストックウェルは、その著『1663年から1963年までのアメリカのコミューン百科事典』で、「実験的共同体」(experimental community)、すなわち自然発生的な共同体に対して同じ志や思想を持つ人びとが自分たちの考えを形にすべく組織する共同体を「コミューン」と呼ぶようになったのは1960年以降のことだと述べている。

それまではさまざまな名称で呼ばれていた。1840年以前では、「共産主義者共同体」(communist settlements)とか「社会主義者共同体」(socialist settlement)と呼ばれ、1860年頃までには「コミュニタリアン」(communitarian)に変わり、1920年頃に「目的共同体」(intentional community)という名称が使われるようになった。これらが1960年以降、「コミューン」という名称にまとめられたのだ。

他にも、「協同組合集合住宅」(cooperative)、「類縁団体」(affinity group)、「拡大家族」(expanded family)、「ユートピアの実験共同体」(utopian experiment)、「集産主義的共同体」(collective)、「村、(芸術家などの)集団居住地」(colony)などの表現も併用されている。ユートピアとは、トマス・モア(Thomas More, 1478-1535)の『ユートピア』(*Utopia*, 1516)に由来する言葉であり、そこから転じて理想的な社会や理想郷を指すものとして使われる。「コミューン」は、上述したように理想を実現することを目的にしているだけにユートピアと同一視されることが多い。

ところで、筆者は「はじめに」では、ある特定の共同体を表す用語としての「コミューン」を定義せずに用いた。「コミューン」については一般的に、同じ志を持つ人びとがすべてを共有する形で、同じ場所に生活を共にするものと考えられているが、『参加と共同体』(*Commitment and Community*, 1972)の著者で社会学者のロザベス・モス・キャンター(Rosabeth Moss Kanter, 1943-)の主張にそってここにまとめておきたい。

「コミューン」の基礎となるのは、人間にとって重要なのは完璧・完全とは

思えない社会に生じる対立や競争、あるいは搾取ではなく、調和、協力、利益の共有だという考え方である。したがって争いの原因となるような競争や、特定の個人だけの利益になるような行動が起こらないようにし、互いに責任と信頼が持てるようにする。そして私的所有という考え方は否定され、すべてが参加者によって共有されることになる。これは、後述するが、人間関係についても、また子育てにもあてはまることである。

既存の社会に存在し、物事の諸悪と考えられたり、不正と考えられたりするものとは対照をなすものだけが存在するように努力していくのが「コミューン」の一つの要素である。参加者の理想や願望を実現する場所であることには違いないが、一般社会にある諸問題からの避難所としての役割も持っている。

同じ理想を抱く人びとが集まって構成される「コミューン」では、外部の人間や政治集団によってではなく、参加者全員の意向で運営・管理がなされていく。あるいは「コミューン」が宗教的なものである場合、その指導者的立場にいる人間によって方向付けされる。かつてアメリカに存在した「ブランチ・デイヴィッドリアンズ」(Branch Davidians) や「天国の門」(Heaven's Gate) などの「コミューン」はその例と言えるだろう。中には独自のルールを設け、一般社会の規範や法律に従わないものもあり、これが一般社会の人たちの批判の対象になるので、「コミューン」が誤解される原因にもなっている。

「コミューン」は外部との物理的な境界を明確に持ち、生活に必要な機能をひとつの建物、もしくは敷地内に集中させる。そして経済的、政治的、社会的活動および家庭生活はすべて共同体内で行われる。経済的活動については、歴史的には教区の利益のために活動する修道院や、株主の利益を生み出すことを目的とする会社とは異なり、参加者のことが第一に考えられるのだ。

「コミューン」を維持していく上では、外部の人間との関係よりも、参加者同士の関係性がきわめて重要視され、参加者同士の結束を維持することが不可欠である。参加者内で不和が生じれば、「コミューン」の崩壊に繋がりがかねないからだ。一般的に「コミューン」は「血縁性」(blood relationship) と「一夫一婦制」(monogamy) とを嫌うところがある。なぜならそのいずれも、「プ

ライヴァシーの温床」<sup>1)</sup> となって参加者同士の一体化を侵食するからである。「一夫一婦制」は性に対する罪惡視, 男女差別, 子どもの独占扶養を生み出す。子どもの独占扶養は, 子どもを中心とする親同志の競争心をかき立てるだけでなく, 出世主義を生じさせてしまうことになる。したがって「一夫一婦制」ではなく「フリーラブ」(free love) の形態を取ることで, 子育ては共同で行われる。この、「フリーラブ」という行動様式が一般社会に偏見を持たせる原因となり, また, 後述するが, 「ヘリコン・ホーム・コロニー」でダンスパーティが催された際, 世間からあらぬ嫌疑をかけられる原因にもなったのである。

こうした特質を備えた「コミュニン」が, アメリカには建国時から現在に至るまでいくつも組織されてきている。日本でもそうした試みがいくつかなされているが, アメリカの比ではない。それではなぜ, アメリカに「コミュニン」が多く組織されるのだろうか。

#### 【註】

- 1) 越智道雄『アメリカ「60年代」への旅』(東京, 朝日新聞社, 1988年), p. 85.

### Ⅲ アメリカにおける「コミュニン」の意義

ロバート・S・フォウガティによれば, アメリカには1787年から1860年の間に137カ所の「コミュニン」が, そして1861年から1919年の間には142カ所の「コミュニン」が建設されたという。また, 筆者がこれまで調べたところによれば, アメリカ最初の「コミュニン」は, キリスト教プロテスタントで, 16世紀オランダの再洗礼派の流れを汲むメノー派(Mennonite)によって1663年にデラウェア州サセックス郡リューイス(Lewes, Sussex County, Delaware)に組織された「ズワーネンデイル」(Swanendael)<sup>1)</sup>であり, これを起源として現在に至るまで数え切れないほどの「コミュニン」がアメリカ国内に組織されては消え, また組織され続けている。



「コミュン」の中には組織されて1年もたたないうちに解散するものもあれば、現在に至るまで存続する長寿のものも存在する<sup>2)</sup>。また、アメリカ国内に組織された後にカナダに場所を移し、再びアメリカへ戻ってくるという「コミュン」の存在も明らかになっている<sup>3)</sup>。なぜこれほどまでにアメリカには「コミュン」が次々と組織されるのだろうか。

その理由の1つとして挙げられるのが、当局を始め、他者に干渉されずに自分たちの理想郷、すなわちユートピアを構築できる土地の広さであろう。既に都市化や開発がしつくされたヨーロッパでは、独自の思想を誰にも干渉されずに展開するだけの広さの土地を確保することは難しいだろうし、歴史が古く、伝統的な習俗が確立しているだけに社会に受け入れられているものとは異なる新しい生き方や信仰を実践・実現することは不可能に近い。アメリカの広大な土地、しかも誰もいないがゆえに古い伝統や因襲に縛られることがないフロンティアの存在は、ユートピアを実践しようとする人たちにとっては大きな魅力だっただろう。まさに「機会のある国」なのである。

しかし、アメリカに「コミュン」が次々と組織された理由はそれだけではない。アメリカ以外にも、南アメリカやアフリカ、アジアなど、広い土地という点では他にも多くの候補地があったはずだからだ。

物理的な要因以外に、「コミュン」を引きつけるもの、つまり「コミュン」を構築しやすい土壌がアメリカにあるのだとすれば、それは17世紀初頭の植民地時代から現代に至るまで育まれてきたものだと言える。1630年にアーベラ号 (Arbella) でやってきたピューリタン (Puritan) たちは、彼らにとっての理想の共同体をアメリカに作り上げようとした。つまり、ピューリタンはアメリカに彼らのユートピアを建設しようとしていたのである。

ピューリタンたちの指導者的立場にいたジョン・ウィンスロップ (John Winthrop, 1588-1649) は、アメリカへ上陸するに際し<sup>4)</sup>、ピューリタンを目の前にして「キリスト教的慈愛のひな型」(“A Modell [sic] of Christian Charity”)の説教を行ったのだが、その内容には「マタイ伝」第5章14節「あなたがたは世の光である。山の上にある町は隠れることができない。(Ye are the

light of the world. *A city that is set on a hill* cannot be hid. [italics mine])」<sup>5)</sup>に基づくところが如実に表されている部分がある。

われわれは「丘の上の町」(a city upon a hill) となることを、考えねばならないからである。すべての人々の眼がわれわれに向けられているのだ。だから、わたしたちがたずさわっているこの事業において神を偽り、主が現在さしのべてくださっている援助の手を引っ込めてしまわれることになれば、わたしたちの噂は知れわたり、世界中の笑われ者となるであろう。<sup>6)</sup>

これは植民当初のアメリカが聖書に依拠するユートピアであったということをよく示している。さらに、ウィンスロップはこうも述べている。

この目的を達成するために、わたしたちは、この事業において強く結ばれて一つの人間とならなければならない。お互いを兄弟愛によってもてなし、余分なものは切り詰めて、他の人の必要に回さなければならない。柔和、やさしさ、忍耐、気前よさによって、親愛なるつき合いを保つべきである。お互いにお互いを喜び、他人の状況を自分のものとして、ともに喜び、あるいは悲しみ、ともに仕事に励み、また苦しまなければならない。つねに、わたしたちがたずさわっている業務と、ひとつの体に連なる人々の集まりである共同体を、目の前に意識しなければならない。そのために、平和の絆における精神の一致を保たなければならない。<sup>6)</sup>

このウィンスロップの説教は 20 世紀に入ってもケネディ (John F. Kennedy, 1917-63) 大統領やレーガン (Ronald Reagan, 1911-2004) 大統領によって、彼らの演説に引用されている<sup>7)</sup>が、それはアメリカという国家のあり方、つまりユートピアを建設するという姿勢がアーベラ号上<sup>4)</sup>でウィンスロップ

によって明らかにされた 1630 年以來、変わっていないことを表しているに他ならない。アメリカはよく「実験国家」と呼ばれるが、ユートピアとして出発したことにその所以があると言っても過言ではあるまい。

アメリカという国家自体が、ユートピアそのものを構想した、それまでヨーロッパでは見られなかった国家であることは、トマス・ジェファスン (Thomas Jefferson, 1743-1826) の「独立宣言」(the Declaration of Independence) でも明らかである。

われわれは、次の真理は自明のものと信じている。すなわち、人はすべて平等に造られている。人はすべてその創造主によって、誰にも譲ることのできない一定の権利を与えられており、その権利の中には、生命、自由、そして幸福の追求が含まれている。これらの権利を確保するために、人びとの間に政府が設立されるのであって、政府の権力はそれに被治者が同意を与える時にのみ正当とされる。いかなる形体の政府であれ、こうした政府本来の目的を破棄するようになった場合には、人びとはそうした政府を改変あるいは廃止する権利を有している。そして、新しい政府を設立し、その政府によってたつ基礎を、またその政府権限の組織形体を、人びとの安全と幸福とにもっとも役立つと思われるものにする権利を有している。<sup>8)</sup>

「独立宣言」が公表された 1776 年の時点では、歴史上比類無き、個々人が自由で、しかも平等な国家を想定しているのだ。

しかし、その理想的な社会を経済的にも平等なものとして、国家レベルで運営することは容易ではない。社会主義・共産主義社会を実現すべく努力してきた国家もあれば、未だにその努力を続けている国家があるが、その評価は定まっておらず、崩壊した国家さえある。国家としての存立が難しければ、同志の意思を常に確認しあえる程度の人口をそなえた「コミュニン」という形態で構築するのが最善の方法だろう。そのような意思を持つ人びとの目には、ユー

トピアとしての出発点を持つアメリカは理想とする社会を実現するのに最適な場所として映るはずである。

【註】

- 1) 初期キリスト教徒の間で行われていたとされる「使徒行伝」第4章32節から35節に記されているような共同生活を再現することを目的とした「コミューン」。奴隷を所有せず、ローマカトリック及びクウェイカー派(Quaker)を除くすべての宗教に対し寛容することを旨とした。また、授業料なしの学校を設けたが、これは植民地最初の試みであった。しかし、この「コミューン」のあった地域が英国の勢力下に入り、ロバート・カー卿(Sir Robert Carr, 1614-81)によって破壊されてしまったため、1年足らずで解散を余儀なくされた。
- 2) 具体例については拙論『「アメリカのコミューン辞典」編纂への試み』を参照されたい。
- 3) 代表的な「コミューン」としてはフッター派(Hutterite, 別称ハタライト派)のものが挙げられる。フッター派は16世紀に再洗礼派の指導者ヤーコブ・フッター(Jakob Hutter, ?-1536)によってモラヴィアに組織され、その後ロシアを経て、アメリカに1874年に移住。絶対平和主義、成人洗礼、政教分離などを主張した。1877年までにサウスダコタ州に3カ所の「コミューン」を開設した。アメリカが第一次世界大戦に参戦すると、絶対平和主義を是としていた彼らは徴兵を拒否した。だが、そうした姿勢に愛国心から敵意を向ける人びとが増えたため、カナダのサスカチュワン州(Saskatchewan)やアルバータ州(Alberta)に移住し、「コミューン」を形成する人たちもいたが、戦後、その一部はサウスダコタ州やモンタナ州へ戻り、新たに「コミューン」を組織。現在ではアメリカとカナダにおよそ230カ所の「コミューン」がある。
- 4) 近年、別の解釈も出てきている。例えば、大西直樹は『史料で読むアメリカ文化史 1 植民地時代 15世紀末—1770年代』において、「昨今の研究では、イギリスのサザンプトン港を出発する前に、陸上で集まった会衆の前に読まれたという説が有力である」(p. 86)と記している。
- 5) アメリカ聖書協会(American Bible Society)の新国際版聖書(The Holy Bible New International Version)では、“You are the light of the world. *A city on a hill cannot be hidden.* (italics mine)”とウィンスロップが用いた表現を活かした表現で書き改められている。
- 6) 遠藤泰生編『史料で読むアメリカ文化史 1 植民地時代 15世紀末—1770年代』(東京、東京大学出版会、2005年)、p. 95。
- 7) ケネディは大統領就任直前の1961年1月9日にマサチューセッツ議会での演説において、レーガンは1989年1月11日に大統領退任演説の中でそれぞれウィンスロップの「キリスト教的慈愛のひな型」を引き合いに出している。
- 8) 荒このみ編『史料で読むアメリカ文化史 2 独立から南北戦争まで 1770年代—1850年代』(東京、東京大学出版会、2005年)、p. 38。

#### IV アメリカに見られるさまざまな「コミューン」の例

人びとが「コミューン」を組織する目的とは一体何なのだろうか。IIで触れたことだが、さまざまな意味でのユートピアを求めていることには間違いないだろう。その目的によって形態が変わることは言うまでもないが、ここではアメリカに開設された「コミューン」をその目的別にいくつか具体的な例を挙げて見てみたい。

多くの「コミューン」に関する辞典で「ヘリコン・ホーム・コロニー」と共に掲載されている「ブルック・ファーム」は、マサチューセッツ州の州都ボストンから20数キロ南西に位置するノーフォーク郡（現サフォーク郡）ウェストロクスベリー（Roxbury, Norfolk County）に、1841年、ドイツ観念論の影響を受けたユニテアリアン派（Unitarian）の牧師で、批評家でもある社会改革者のジョージ・リプリー（George Ripley, 1802-80）を中心に、トランセンデンタリスツ（transcendentalists：超絶主義者）によって組織されたおよそ80ヘクタールほどの「実験的共同体」である。ユニテアリアニズム（Unitarianism）の実践拡大を第一義的な目的としていたが、1837年の経済恐慌が生み出した社会不安の産物であったと捉えることもできる<sup>1)</sup>。

その正式名称は「ブルック・ファーム農業・教育研究所」（Brook Farm Institute of Agriculture and Education）であったが、「ブルック・ファーム産業・教育協会」（Brook Farm Association for Industry and Education）と変更された。農業中心のコミューンだが、リプリーの考えでは成員の「頭と手の労働の間に現在よりも自然な統一を確保すること」<sup>2)</sup>が目的で、農場における肉体労働と知的労働との結合による教養ある簡素な生活を目指した。

組織当初はリプリーとその妻や姉妹、それにナサニエル・ホーソーンやジャーナリストのチャールズ・アンダスン・デйна（Charles Anderson Dana, 1819-97）を含む15名が成員であった。最盛期には120名以上の成員を数え、ホーソーンやデйнаの参加を得ていたこともあって、知識階級の拠点のようにも捉えられていた。

彼らは労働によって生活費全般を賄うという考え方を軸に、5月から10月までの期間は週当たり60時間、11月から4月までの期間は48時間、各成員が労働し、労働しない場合には週4ドルを支払わなければならないという取り決めをしていた。また、どんな取り決め事にも、一人一票の議決権があった。

「コミューン」としては順調に運営され、最初の年だけでも4,000人以上の見学者を迎えた。その中には、トランセンデンタリズムの代表的提唱者で思想家・詩人のラルフ・ウォルド・エマスン (Ralph Waldo Emerson, 1803-82)、ユニテアリアン派の牧師で社会改革家のウィリアム・エラリー・チャニング (William Ellery Channing, 1780-1842)、ジャーナリストで政治家のホラス・グリーリー (Horace Greeley, 1811-72)、作家・評論家で社会改革家のマーガレット・フルー (Margaret Fuller, 1810-50)、トランセンデンタリストで思想家のヘンリー・デイヴィッド・ソロー (Henry David Thoreau, 1817-62) らがいた。リブリーの妻でニューイングランドの名門出身のソフィア・ウィラー・デйна (Sophia Willard Dana, 1803-61) は1840年代初期にトランセンデンタリズムに惹かれ、機関誌『ダイアル』(*The Dial*) に寄稿している。

この「コミューン」のもっとも顕著な成果は教育であった。「コミューン」内の学校では進歩的な教育が展開された。ハーヴァード大学も、大学生活で問題を抱えた学生がここで特別教育を受けることを推奨した。カリキュラムにはラテン語、ドイツ語、ギリシャ語、道徳学、数学、植物学、古典、音楽、美術などの他に、理論と実践の農業三年コースを設けていた。

また、生徒は一日当たり1時間ないし2時間、労働することが義務づけられており、これはスイスの教育改革者ヨハン・ハインリッヒ・ペスタロッツ (Johann Heinrich Pestalozzi, 1746-1827) の理論と実践に基づいていた。「ブルック・ファーム」では誰もが、自分の知っていることや出来ることを教師として教えることができたと同時に、誰もが生徒になることが可能であった。また6歳以下の幼児のための教育施設も設けたが、これは後述するが、シンクレアが「ヘリコン・ホーム・コロニー」でも展開したことである。

娯楽も重視し、舟遊び、ピクニック、ダンスパーティ、講演、遠足などを行ったり、文学サークルが設けられたり、朗読会が開かれたり、劇が上演されたりした。また、頻繁にボストンまでの 14.4 キロを歩いて音楽会へ行くこともあった。

だが、1843 年にはフーリエ主義者 (Fourierist) のアルバート・ブリズベン (Albert Brisbane, 1809-90) の影響下に置かれ、共産主義的な「コミューン」へ傾斜し、1845 年 5 月 3 日、名称を「ブルック・ファーム・ファランクス」(Brook Farm Phalanx) とした。しかし翌年の 1846 年 3 月 3 日、火災に見舞われ 1847 年に解散を余儀なくされた。

成員であったホーソーンは幻滅し、その体験を『ブライズデイル・ロマンス』(*The Blithedale Romance*, 1852) として遺した。ホーソーン自身、その序に次のように記している。

本作品『ブライズデイル』に多くの読者はおそらくロクスベリーにあったブルック・ファームのかすかな、非常に忠実な影を認めるだろう。ブルック・ファームは（今では 10 年以上も前のことだが）社会主義者の集団によって所有され、耕作された農場だった。著者としてはこの共同体を考えていたことを否定するつもりはない。<sup>3)</sup>

「ブルック・ファーム」へのホーソーンの幻滅感は、物語の語り手である詩人のマイルズ・カヴァデイル (Miles Coverdale) に投影されているように思える。「楽しい谷」という意味合いのブライズデイル、すなわちユートピア社会が人間のエゴによって崩壊する過程をカヴァデイルが眺めるのだが、多くの「コミューン」が持続しないことをホーソーンの視点で描いているように思える作品である。

イングランドの空想的社会主義者 (utopian socialist) であるロバート・オーウェン (Robert Owen, 1771-1858) は、その著書である『新社会観』(*A New View of Society*, 1813) に著した理念を実践するために、インディアナ

州ウオバシュ (Wabash, Indiana) に「ニュー・ハーモニー」(New Harmony) という「コミュニティ」を開設した。後述することになるが、この土地はもともとジョージ・ラップ (George Rapp, 1757-1847) が率いた「ハーモニー・ソサイエティ」(Harmony Society) という「コミュニティ」のものであり、そこを譲り受けて設立したのだった。

オーウェンを「コミュニティ」建設へと導いたのは、アメリカのトランセンデントリストに多大な影響を与えたロマン派の詩人サミュエル・テイラー・コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) であった。イングランドのマンチェスター (Manchester) にある「マンチェスター文学哲学協会」(Literary and Philosophical Society) に籍を置いていたオーウェンは、その協会を通じてコールリッジに出会っている。

コールリッジはジョージ・ワシントン (George Washington, 1732-99) や、アメリカ革命をあおるパンフレット『コモン・センス』(*Common Sense*, 1776) を発表したトマス・ペイン (Thomas Paine, 1737-1809) に心酔し、専制君主のいないアメリカに憧れてユートピアの建設に乗り出した。そして彼に賛同したロバート・サウジー (Robert Southey, 1774-1843) ら数人の詩人仲間と共に構想したのが、「パンティソクラシー」(pantisocracy) という名の「コミュニティ」であった。

ジャーナリストのエリナー・ランダー・ホーウィッツ (Elinor Lander Horwitz, 1929-) はコールリッジの考え方から「パンティソクラシー」を次のように紹介している。

コールリッジによれば、パンティソクラシーは民主主義とは正反対のものだ。彼の説明では、民主主義においては誰もが最も下等な野蛮人のレベルにまで引きずり下ろされてしまう。パンティソクラシーにおいては、誰もが最も知的で貴族的な会員にまで引き上げられるのだという。<sup>4)</sup>



この「コミューン」を建設するための具体的な場所も決まっていたが、実行に移す際に誰がアメリカに渡るかで仲間割れをし、計画は白紙となってしまった。「コミューン」を組織する難しさはここにある。つまり、関わる人たちがすべてが同じ方向を向いていなければ不可能なのだ。コールリッジの夢は実現しなかったものの、この話に感銘を受けたオーウェンが「コミューン」への憧れを募らせ、「ニュー・ハーモニー」を建設するに至った。

「コミューン」はユートピアと同一視されることが多いことは既に触れたが、ユートピアといえば、ユートピア小説が存在する。トマス・モアの『ユートピア』、サミュエル・バトラー (Samuel Butler, 1835-1902) の『エレウオン』 (*Erewhon*, 1872), エドワード・ベラミー (Edward Bellamy, 1850-98) の『かえり見れば』 (*Looking Backward*, 1888), ウィリアム・モリス (William Morris, 1834-96) の『ユートピア便り』 (*News from Nowhere*, 1890) などがその代表的なものとして挙げられる。

この他にも多くのユートピア小説が多くの作家によって発表されているが、フランスの哲学者で空想的社会主義者のエティエンヌ・カベール (Étienne Cabet, 1788-1856) は『イカリアへの旅』 (*Le Voyage en Icarie*, 1840) という小説を発表している。このユートピア小説には人々が平和で豊かに暮らし、君主や階級差別も、不平等な税金もない、全ての男性に選挙権が約束された「イカリア」 (Icaria) というユートピアが描かれており、それを実践しようとしたのが同名の「コミューン」である。

「イカリア」の実現を目指そうと決めたカベールは、まず、ロバート・オーウェンに会いにイングランドへ向かった。そしてオーウェンがかつてテキサスに「コミューン」を建設しようとしていたことを聞くとすぐに、仲介者を通して、日本の総面積の約 1.8 倍にも及ぶ広大なテキサスに 100 万エーカーの土地を購入した。

その後、カベールは 1848 年に仲間の社会改革者と共にフランスを後にするが、テキサスに到着した彼らを待っていたのは 100 万エーカーではなく、わずか 1 万 240 エーカーの土地だった。しかもやせた土壌であったために、そ

の場所を手放し、新たにイリノイ州ノーヴー (Nauvoo, Illinois) にあったかつてのモルモン教徒の拠点を購入して、そこに「コミューン」建設を試みている。建物や土地がすでに整備された場所に「コミューン」を設置する方法は、ジョージ・ラップから「ハーモニー・ソサイエティ」の土地を購入したオーウェンに倣ったものであった。このように、古い「コミューン」から新しい「コミューン」へとその知識が伝えられているのは非常に興味深いことである。

文学作品に描かれる理想郷の構築を目指した「コミューン」がある一方、アメリカには宗教が基盤となる、つまり聖書に基づく「コミューン」が数多く存在する。それは前章で既に述べたように、アメリカの成立構想を考えれば当然のことであろう。

聖書には、「使徒行伝」第2章44節の「信者たちはみな一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、それぞれの必要に応じて皆でそれを分け合った」という文言が存在する。この他にも「共有共産」を前提とする「コミューン」を連想させる文言があり、それらに依拠した「コミューン」開設の試みがなされてきたのだ。

1803年にドイツのヴュルテンベルク (Wurttemberg) からアメリカにやって来たジョージ・ラップは「ハーモニー・ソサイエティ」を組織した。聖書の文言を文字通り捉えていたラップは、共同生活について「使徒行伝」第4章32節「信じる者の群れは心と思いを一つにし、だれひとりその持ち物を自分のものだとは主張する者がなく、いっさいの物を共有していた」を引用して人々に説いた。

また「オナイダ・コミュニティ」(Oneida Community) の指導者ジョン・ハンフリー・ノイズ (John Humphrey Noyes, 1811-1886) は「マタイ伝」第22章30節の「彼らは娶ることも、嫁ぐこともない」という箇所を引き合いに出した。ノイズはこの文言を、全ての男性は全ての女性を愛すべきで、男女間の愛は一人の相手に特定するような利己心や独占欲によるものではないと解釈したのである。したがって「オナイダ・コミュニティ」では「フリーラブ」が実践された。この問題が後にシンクレアを悩ませることになる。「ヘリコ

ン・ホーム・コロニー」では週に一度、メンバー全員が参加できるダンスパーティを行っていたが、コロンビア大学で哲学を教える既婚者の教授がテーブルで給仕していたアイルランド系の少女二人とダンスをしたと『ニューヨーク・サン』(*New York Sun*)が報道した。その他のメディアも「ヘリコン・ホーム・コロニー」は「美しい女性を侍らせるために開設した」<sup>5)</sup>ものであるとし、「オナイダ・コミュニティ」で行われていたような「フリーラブ」が実践されているのではないかという噂を報道されてしまったのだ。

文学や宗教を基にする「コミューン」が数多く存在する中で、移民してきたばかりのユダヤ人、特にロシア系ユダヤ人が組織する「コミューン」は特異な存在と言えるかもしれない。それは、その目的が「ロシアはもとよりヨーロッパ、あるいはヨーロッパ全土における反ユダヤ主義に基づく迫害や虐殺をまずは逃れ、定着すべき国に同化するための時間的余裕を得ることだった」<sup>6)</sup>からだ。

歴史的に見ると、特に1830年から60年と、1960年代から70年代の2つの時代には、アメリカで「コミューン」の建設が活発化している。いずれの時代も、新しい宗教の誕生をはじめ、女権拡張や女性解放運動、人種差別問題、あるいは産業・工業の発展による物質主義の先行を懸念する動きなど、社会的な変化が起きている。これはフォウガティが指摘するように、「コミューン」、あるいはユートピアと社会とに密接な繋がりがあることを裏付けるものである。国家を頼りにせず、自分たちの力で理想社会を構築する試みが絶えることなく現在までも続いていることは、ユートピアがその本来の意味である「どこにも無い場所」(no where)であることを皮肉にも実証しているといえる。

1960年代に創設された「トゥイン・オウクス」(Twin Oaks)は現在に至る息の長い「コミューン」の1つである。行動主義心理学者のB・F・スキナー(Burrhus Frederic Skinner, 1904-90)の理論を実践することを目的に設立された。この「コミューン」はヴァージニア州リッチモンド(Richmond, Virginia)から西へ80キロほど行った所にあり、現在ではハンモック製造と販売で広く

知られている。

このほかに前掲書『参加と共同体』においてキャンターは、1960年代に目立ったドロップアウト的人間、つまり競争を避ける人たちが寄る「隠遁型コミュニティ」(retreat communes)<sup>7)</sup>や、個人主義が際限なく発達したアメリカ社会のなかで共同生活にあこがれを抱く人たちが集まる「奉仕型コミュニティ」(service communes)<sup>8)</sup>が登場したことをあげている。また昨今では「エコヴィレッジ」(eco village)と呼ばれる、エコロジーを意識した「コミュニティ」も生まれてきている。

このようにアメリカには、実にさまざまな形態や目的の「コミュニティ」が現在も次々と構築されている。シンクレアが構想し、火事のため1年足らずとは言え存在した「ヘリコン・ホーム・コロニー」は、果たしてこうした「コミュニティ」と同列に語れる共同生活の場であったのだろうか。

#### 【註】

- 1) ゾルダン・ハラスティ 著宇賀博編訳『ブルック・ファームの牧歌』(東京、恒星社厚生閣、1991年)、pp. 10-11.
- 2) <http://historymatters.gmu.edu/d/6592/>
- 3) Nathaniel Hawthorne, *The Blithedale Romance*. 1852. (*The Blithedale Romance and Fanshawe*. Ohio : Ohio State University Press, 1964), p. 1.
- 4) Elinor Lander Horwitz, *Communes in America: The Place Just Right*. (Philadelphia and New York : J. B. Lippincott Company, 1972), p.75.
- 5) Upton Sinclair, *The Brass Check : A Study of American Journalism*. (1920. New York : Arno Press Inc., 1970), p. 65.
- 6) 池田智『アメリカにおけるユダヤ人コミュニティ』(*Humanitas*, 玉川大学学術研究所、人文科学研究センター、2010、pp.52-74)、p. 55.
- 7) Rosabeth Moss Kanter, *Commitment and Community : Communes and Utopias in Sociological Perspectives*. (Massachusetts : Harvard University Press, 1972), p. 175.
- 8) Rosabeth Moss Kanter, *op.cit.*, p. 191.

## V ヘリコン・ホーム・コロニー

筆者は埼玉県入間郡毛呂山町にある「新しき村」を訪ねたことがある。この

「村」は、白樺派の武者小路実篤が『新しき村五十年』への序文に、「僕は人類が今日まで進歩して来た以上、人間はお互いに助けあって働く事で、すべての人が安全に生活出来、その上に自分の真価を生かすだけの余力出来ていいはず」と思い、この信念から同志と共にこの仕事、つまり『新しき村』を始めたのだ<sup>1)</sup>と語っているように、同志とともにいわば理想的な共同体、すなわちユートピアを実現すべく1918年（大正7年）に建設した「コミュン」で、出発点は宮崎県児湯郡木城村だったが、1939年（昭和14年）に、筆者が訪ねた埼玉県入間郡毛呂山町に分村・移転した。およそ10ヘクタールにも及ぶ敷地には、住居をはじめ、田畑、集会場、食堂、美術館、生活文化館と呼ばれるギャラリーなどがあり、見学することができる。

日本では、農業を営んでいた山岸巳代蔵が「山岸式養鶏会」として創始した現在の「幸福会ヤマギシ会」や、富士山麓に開設されている「木の花ファミリー」、あるいは宗教共同体としての「一燈園」などが知られているが、作家が中心となって設立した「コミュン」が日本にも存在し、武者小路のことは借りるなら「主意をまげずに今日まで来、最近、村は空想の世界から脱して現実の世界になってきている」<sup>1)</sup>ことは筆者にとって興味深い。

アメリカにおいて作家が積極的に関わりをもった「コミュン」といえば、「はじめに」で触れた「ブルック・ファーム」がある。既に述べたように、『アメリカのコミュン・ユートピア歴史辞典』において、この「ブルック・ファーム」と同列に扱われているのが、「ヘリコン・ホーム・コロニー」である。

筆者はこの辞典に従って、既に発表した拙論に、『アメリカにおけるコミュンの系譜―「ヘリコン・ホーム・コロニー」理解への手がかりをもとめて』という標題を掲げた。しかし、シンクレアに関する資料を読み進めてきた今、この標題に疑問を持つに至った。

シンクレアは1906年6月4日の『インディペンデント』(*The Independent*)誌で、自身が構想する「ヘリコン・ホーム・コロニー」についてのコンセプトを初めて公にし、後に『産業共和国』(*The Industrial Republic*, 1907)

の第8章「共同宿泊所」(The Coöperative Home)に転載している。その記事やシンクレアの『自叙伝』を始め、『プラス・チェック』などを読んでいくうちに、「ヘリコン・ホーム・コロニー」の姿には、一般的な「コミューン」とはかなり異なるものが潜んでいるのではないかと感じるようになった。

シンクレアが描いた理想的な「ヘリコン・ホーム・コロニー」の姿とは、食事をつくり、食器を洗い、洗濯物にアイロンをかけ、肉を得るために家畜や家禽を処理し、牛乳からバターをつくり、パンを焼き、穀物を製粉し、鶏を育て、薪をつくり、果物をジャムにし、家屋を暖め、部屋を飾りつけ、子どもの躰けをし、そして、何よりもシンクレアにとっては著作活動をするための場所なのだ。

著作活動はともかく、これらの作業は「コミューン」では参加する人が手分けし、共同で行うのが一般的である。しかし、シンクレアはこれらの仕事を、専門家を雇うことで解決しようとした。時間や余計な体力を浪費することがなく、自分のやりたいことに専念できると考えたのだ。

ニューヨークやその近郊には、偏見なく共感してくれる男女が何千というに違いない。彼らはこうした状況をはっきりと理解しており、自身の生活の中にある苦難のために不利な立場にあるからだ—作家、芸術家、音楽家、編集者、教師、知的職業に従事している人々というのは、下宿屋やアパート式のホテルを嫌い、しかも使用人を使うことも嫌がり、私自身の子どものように寂しがりやで、気むずかしい子どもをかかえ、ひどい食べ物を食べたり、時間と体力をムダにしたりすることが私よりも嫌いな人たちである。<sup>2)</sup>

シンクレアは自分自身を基準にした構想をしている。そこには「コミューン」という形態は見えてこない。立地についてはニューヨークまで1時間以内と設定しており、「コミューン」としての分類で考えれば、都市型の「コミューン」と言えなくもない。しかしシンクレアが構想しているのは、さまざま

まな仕事をお互いに共有しながら行う共同体ではなく、各部署に専門家を有給で雇用し、何家族かが同じ建物及び敷地内で生活していくという形態である。すべてを、専門家を雇って管理してもらうのだ。

また、シンクレアは参加者に 10,000 ドルの投資をしてもらうことで、「ヘリコン・ホーム・コロニー」を株式会社として運営していく構想も抱いていた。会社が土地を所有し、その大半を農地や林、家屋に充てることを考えている。参加者の住居に充てる土地は細分化し、面積や場所によって価格を決め、株所有者に貸すことにしている。これでは共有財産制をとる多くの「コミュン」とは全く異なる性質を備えていることになる。

しかも、結果的には利用されなくなった校舎を買い取ることになるのだが、構想時点ではその土地を借りた家族は独自の好みにしたがって、各自で家屋を建設することになっている。シンクレア自身は 4 部屋か 5 部屋の田舎風の家屋を考えている。こうした家族用の住居以外に、会社が所有するアパートや独身者用の寮を設けることまで計画しているのだ。

「コミュン」的な面を強いて取り上げるならば、食事は食堂でしなければならないという点だろうか。しかし、これはシンクレアの合理主義に基づくもので、あくまで食材を各家庭が購入するよりも大量に購入する方が経済的だという理由からである。食堂での座席は家族ごとに別々となるか、「気の合う仲間同士」<sup>3)</sup>で座ることになっている。各家族や個人の嗜好や、お互いの「相性」<sup>4)</sup>を尊重しているということになろうが、これでは「コミュン」ではない。食事の内容についても、それぞれの好みに応じており、中には、肉食主義者用のサービスもある。その費用は一律ではなく、サービスの内容に応じて変動するのだ。

同じ敷地内に居住してはいるものの、各々の経済力や嗜好によって、異なった生活を送っていくことができる、生活に便利な場所というのがシンクレアの考える「ヘリコン・ホーム・コロニー」なのである。こうして見てみると、やはり、シンクレアが目指した共同生活体とは「コミュン」ではなく、社会学者 E・ディグビー・ボールツェル (Edward Digby Baltzell, 1916-1996) がそ

の著『プロテスタント・エスタブリッシュメント』(*The Protestant Establishment*, 1964)で、19 紀末から雨後の筍のごとくアメリカ国内に次々と開設されていったと指摘するクラブ<sup>5)</sup>、あるいは文人をはじめ、芸術に携わる人や専門職にある人専用のホテルに近いということがわかってくる。

既に述べたように、シンクレア自身は、「ヘリコン・ホーム・コロニー」をアディロンダック山脈に存在するクラブ<sup>6)</sup>のように想定しているのである<sup>7)</sup>。1882 年から 1929 年までに 4,500 ものクラブが開設されたというクラブ<sup>8)</sup>についてボールツェルは次のように記している。

今世紀、クラブは才能ある人物やその家族が上流階級の生活や社交組織に入り込むために最も重要な斡旋機関のひとつとなっている。第一次世界大戦前に我が国を訪れるとすぐにマックス・ウェーバーは、我が国アメリカの体制についてこう述べている。「有名なクラブに所属することが何にもまして大切なことである。加入することができなかった男性は紳士ではないのだ。」<sup>9)</sup>

クラブは、アメリカの上流階級の生活には欠かせない社交の場である。後述するが、シンクレアは、おそらく、自らの出自の良さと本来送ることができたはずの上流階級の生活を常に意識していたのだろう。金銭的な心配をせず、日々の雑事に時間と労力を奪われることなく、執筆だけに集中することができる生活にシンクレアは憧れを抱いていたのかもしれない。

ボールツェルが指摘するように、クラブは排他的団体である<sup>10)</sup>。シンクレアは「ヘリコン・ホーム・コロニー」の加入条件として、唯一「相性」<sup>4)</sup>を挙げているが、「相性」とは皮膚感覚的なもので、きわめて非客観的な基準で非常に不明確であり、またこれほど排他的な基準もないだろう。シンクレアは「ヘリコン・ホーム・コロニー」を、同好の士、つまり執筆活動や芸術活動、あるいは専門職に就いているような、いわば社会的にエリートと考えられる人びとの集まりにしたいと考えているのである。メンバー全員が同じ思想に基づ



いて、何か一つのものを造り上げていくのではなく、個々人の専門職を十分に継続できるための場を求めたのだ。

「ヘリコン・ホーム・コロニー」を、ニューヨークから1時間のニュージャージー州エングルウッドに設置したことは、知識人らがそれぞれの活動をしやすい文化圏に近い場所であったということはもちろん、シンクレアがクラブを意識していたひとつの証にもなるだろう。ニューヨークはユニオン(Union)やニッカーボッカー(Knickerbocker)といった、アメリカにおけるメトロポリタン・クラブの中心地である。その郊外にクラブを開設するとなれば、カントリー・クラブを意識していたということになる<sup>11)</sup>。

また「ヘリコン・ホーム・コロニー」への加入料は25ドルであり、ボールツェルが19世紀末のクラブの加入料として30ドルという金額を1つの例として出している<sup>12)</sup>ことを考えても、やはりシンクレアには「ヘリコン・ホーム・コロニー」をクラブとして構想する意識が強かったことがわかる。「はじめに」で触れたように、社会の底辺に身を置いていた移民は週7ドルあれば十分に生活ができたという事実を考えると、25ドルという高額な加入料を支払うことができる上、「相性」<sup>4)</sup>の合う、シンクレア自身にとって都合の良いメンバーだけを集めていたことは明らかだ。

このことは、参加者の顔ぶれを見れば明らかである。コロンビア大学教授で哲学者のW・P・モンタギュー(W. P. Montague, 1873-1953)夫妻、ストリンドベリ(Johan August Strindberg, 1849-1912)の翻訳で知られるエドウィン・ビョークマン(Edwin Bjorkman, 1866-1954)夫妻、後にカトリック系機関誌『コモンウィール』(*Commonweal*)の創刊者で編集者になるマイケル・ウィリアムズ(Michael Williams, 1877-1950)、当時まだ大学生であった作家のシンクレア・ルイス(Sinclair Lewis, 1885-1951)、哲学者で教育者のジョン・デューイ(John Dewey, 1859-1952)、小説家ヘンリー・ジェイムズ(Henry James, 1843-1916)の兄で心理学者のウィリアム・ジェイムズ(William James, 1842-1910)などである。

しかし、シンクレア本人の意識と、周りの見方にギャップが生じていたこと

は確かで、新聞等で取り上げられる「ヘリコン・ホーム・コロニー」の姿に、シンクレアは頭を抱えていたところがある。「ヘリコン・ホーム・コロニー」は1年足らずで焼失してしまったが、その点であるいはシンクレアにとって都合のよい不運だったのかもしれない。

「ヘリコン・ホーム・コロニー」について、「コミュニケーション」としての性質を備えていないことを証明するかのような非常に興味深いエピソードがある。しかも、シンクレアが「ヘリコン・ホーム・コロニー」でこだわった「相性」<sup>4)</sup>に深く関わることだ。それは、日本人を母に、ドイツ人を父として長崎で生まれた日系ドイツ人で、後にドイツを経てアメリカに居を定めたカール・サダキチ・ハートマン (Carl Sadakichi Hartmann, 1867-1944) についてのことである。ハートマンがシンクレアに「サダキチ・ハートマンが伺います」<sup>13)</sup>と認めた絵はがきを送り、押しかけたことがあった。自らを第三人称としたこの書き出しに、シンクレア自身は「高貴な感じがする」<sup>13)</sup>と一瞬は喜んでいただろうだが、彫刻家のジョウ・デイヴィッドスン (Jo Davidson, 1883-1952) と女性を一人連れてやって来たハートマンの宿泊を断っているのだ。『産業共和国』の第8章「共同宿泊所」には、仲間を募っている旨が記されている<sup>14)</sup>が、シンクレアは「空き部屋がなく、彼を泊めることは不可能だった」<sup>15)</sup>と、事実とは矛盾した理由を挙げてハートマンらの宿泊を拒否している。

シンクレアはハートマンらの着衣について、「薄汚いセーターを身につけていた」<sup>16)</sup>と記している。「ボヘミアンの仲間の『王者』とたてまつられる」<sup>17)</sup>こともあったハートマンが「薄汚いセーター」を着用していたとしても不自然なことではない。ハートマンは非常に人を食ったところがあって、相手によっては貸衣装を利用することがあった。ラファエル前派の宣言書の編集に関わったウィリアム・マイケル・ロセッティ (William Michael Rossetti, 1829-1919) を人づてに訪ねたときには、「フロックコート、手袋、ステッキ」<sup>18)</sup>を借り、「上衣の襟にはパセリーをさした」<sup>18)</sup>という。明らかに「街の紳士と思われてはならないという心づかいからの装いであった」<sup>18)</sup>。そんなハートマンが「薄汚いセーター」でヘリコン・ホームを訪ねたのは、そこが労働をも前提

とする「コミュニオン」だと思っただことだったろう<sup>19)</sup>。

だが、シンクレアはそんなハートマンに悪い印象を持った。それはシンクレアが「ヘリコン・ホーム・コロニー」を「きちんとした文学者の集まり」<sup>20)</sup>と構想しているからだ<sup>21)</sup>。

しかも、シンクレアはハートマンが酒を飲んでたことを指摘している<sup>22)</sup>。「コミュニオン」によっては、酒をはじめ、人間の理性を揺るがしかねない嗜好品を禁じることは多々ある。だが、シンクレアにとって、酒には全く別の問題が潜んでいる。シンクレアの酒嫌いについては拙論『「口の中の敵」』についての考察：アプトン・シンクレアの強い思い』で述べたが、実の父親が酒で身を持ち崩したがために、『怒りの杯』(*The Cup of Fury*, 1956)を著し、徹底的に酒批判を展開しているのだ。「薄汚いセーター」を身につけ、しかも酒を飲んでたのでは「相性」<sup>4)</sup>が合うはずがなく、ハートマンに部屋を提供するはずもない。だが、仮にも『ジャングル』でマックレイカーや社会主義者として、いわば社会改革者としてその名を知られるようになっていたのだから、ハートマンを招き入れ、酒の害悪を熱心に説いて改心させようとする姿勢が見えてもいいはずである。しかしそうしたシンクレアの姿は見えてこない。それにも関わらず、なぜこのような場所を構想したのか。それはシンクレア自身の日々の生活の中に答えがあると言える。

シンクレアは1900年、22歳の時に掘っ立て小屋にこもって、『春と収穫』(*Springtime and Harvest*, 1901)の執筆活動に入った。この時、シンクレア家と親交のあったフラー家の娘、メタ (Meta Fuller, ?1881-?) がシンクレアのために毎日食事を運ぶことになった。

執筆に集中できる時間ができたことを喜んではいたものの、シンクレアはメタの来訪を疎ましく感じていた。3歳年下のメタだが、まるで幼い子どものように自分の言うことに何でも従う姿勢を、シンクレアは快く思っていなかった。しかしその一方、自分の書いたものについてメタに話ができることについては嬉しく感じていた。この時期のシンクレアには、このような手前勝手なところが多々あったようだ。こうした関係のなかで徐々に親しくなった二人だ

が、シンクレアはメタに対して、自分は隠遁者のように生きる人間だから、普通の人のように結婚して子どもを持つようなことはできないと告げていた。

『春と収穫』を書き終えたシンクレアは掘っ立て小屋を後にし、生活の拠点であるニューヨークへ戻った。メタとは相変わらず親しくしていたが、二人の親密さを両家の親が黙っていなかったのである。

シンクレアの母親は、自らはメソディスト派でありながら、シンクレアが子どもの頃、地元では最も上流階級の集まるエписコパル派の礼拝へ連れて行く<sup>23)</sup>ほど、かつてのシンクレア家の社会的地位を意識していた。またメタは叔母から多額の遺産を継ぐような家庭にあった。こうした上流階級の精神を備えた人たちは「行き慣れた場所以外には決して行かず、馴染みの人間以外とは決して知り合おうとはしない」<sup>24)</sup>ところがある。そんなお互いの親の勧めもあってか二人は結婚することになった。

だが、シンクレアはこの頃、既に「書くことが強迫観念となった作家」<sup>25)</sup>となっていたため、そもそも結婚など考えておらず、メタとも兄と妹のような関係を保つことを望んでいた。したがって、結婚という形をとったものの、二人の関係に変化はなかった。そして子どもを作らないという約束も守られていた。

しかし、二人のプラトニックな関係がメタの肉体と精神に悪影響を及ぼしていると医者に告げられてしまう。そこで二人は医者のおすすめのバース・コントロールを試みたのだ。

ところが、メタは妊娠してしまう。妊娠の事実には驚いたのはシンクレアだけではなかった。メタ自身もまた、妊娠したことによって、これまでのシンクレアとの関係が崩れてしまうのではないかという恐れをいだきながら、1901年12月1日にデイヴィッド (David) を生むことになったのだが、不運にもデイヴィッドは病気がちの子どもであった。

この頃、シンクレアには家族を養っていけるだけの経済力がなかった。妻と子どもに惨めな思いをさせることは、自身の幼い頃の経験があったシンクレアには、許し難いことであった。しかし、現実には厳しい状態であった。

そのような様子に業を煮やしたメタの父は、それまで行っていた毎月 25 ドルの仕送りをやめ、メタとデイヴィッドを自分の元に呼び寄せてしまった。定職につかないシンクレアは、妻と子どもと一緒にいるに値する人間ではないと判断したのだ。

1903 年、シンクレアはメタとデイヴィッドを、義父から取り戻し、家族水入らずの生活をするようになるが、夫婦関係は兄妹のようなプラトニックな関係へと戻っていた。メタが再び妊娠することを恐れていたからである。

子どもの育て方を知らない二人だったので、デイヴィッドが 2 歳半になっても歩けないことをさほど気にしていなかった。だが、くる病と栄養失調の状態にあると医者で診断された後、メタは子どもを育てることに専念していく。

ちょうどこの頃、『プリンス・ハーゲン』(*Prince Hagen*, 1903) が発表され、その売れ行きは好調であった。そこで、シンクレアはその印税で丸太小屋を建てることにした。メタはデイヴィッドを育てながら、その小屋を暮らしやすいものにしようと努力するが、それが原因でメタは肉体的にも精神的にも正常ではなくなってしまう。症状は悪化する一方で、ついにはピストルを頭にあって自殺しようとするほどになってしまった。シンクレアは妻と、まだ幼いデイヴィッドの面倒を見ざるを得なくなったのだ。

そのような状況の中、二人はエドワード・ベラミーやシャーロット・パーキンス・ギルマン (Charlotte Perkins Gilman, 1860-1935) などの社会主義作家が書くさまざまな作品を読むことに夢中になっていった。二人はとりわけ、社会における女性の地位について関心があり、ギルマンの著書『婦人と経済』(*Women and Economics*, 1898) などを読んでいた。ギルマンは女性が経済的自立を果たさなければ、真の意味で自由になることはできないと説き、家庭にも工場などと同じように科学的管理法が取り入れられるべきだと主張した。キッチンは一カ所だけとし、キッチンのない住居や託児施設のようなものを作ることがギルマンの考えであった。これはまさに、シンクレアの構想した「ヘリコン・ホーム・コロニー」と重なるものである。

そして 1906 年、『ジャングル』がベストセラーとなったのだ。『プリンス・

ハーゲン』の印税で小屋を建てた時と同じように、シンクレアは『ジャングル』で得た莫大な印税を、自分の生活を改善できそうな「ヘリコン・ホーム・コロニー」に投資したのである。

シンクレア自身は本来、南部アメリカにあって由緒正しい家柄で育つはずだった。シンクレアの家系を辿れば歴然たるものがある。中田幸子は『アプトン・シンクレア 旗印は社会正義』の中で、フランス軍艦のインサーゲント号 (the Insurgent) との海戦で活躍したコンステレーション号 (the Constellation) に乗船していた曾祖父のアーサー・シンクレア准将 (Commodore Arthur Sinclair) や、日本を開国へと導いたペリー提督の小艦隊の一つを指揮して日本へやって来た祖父のアーサー・シンクレア大佐 (Captain Arthur Sinclair) を引き合いに出して、シンクレアの父方の家系を「海軍の歴史そのもの」<sup>26)</sup> であるとしている。

シンクレアは順当な人生を送ることができていれば典型的なワズプ (WASP: White Anglo-Saxon Protestant) としてその家柄を享受することができはずだった。ところが、父親が酒の卸売りをするセールスマンで、決まった収入は期待できず、稼ぎ出した金を酒に費やしてしまうために、一家は常に困窮した状態であったのだ。そのため、シンクレアは母と共に、裕福な母方の親戚のもとへ身を寄せなければならないことが多々あった。

また、酒を飲むと夜の町に姿を眩ませてしまう父親を、幼いシンクレアが探しに行くことが度々あったという。シンクレアはそうした自身の惨めな様子を、アンソニー・アーサー (Anthony Arthur, ?-2009) やその他の批評家が自伝的小説と指摘する『愛の巡礼』の中で、主人公サーシスに重ねるように描いている。

由緒ある家柄に生まれながら貧しい暮らしをし、独立しなければならなかったシンクレアは、大学在学中から切り売り原稿を書いてなんとか生計を立てていた。その一方で自分自身が本当に書きたいものも書き続けたいという気持ちがあり、常に何かを書いていなければ精神的に安定感をえることができないといった「書くことが強迫観念となった作家」<sup>25)</sup> となった。

さらには運か不運か、『ジャングル』で名声を確立し、時の大統領セオドア・ロウズヴェルト (Theodore Roosevelt, 1858-1919) にマックレイカーとしてのレッテルを貼られたため、その方向性を変えることが出来なくなっていた。そうした状況にあって、シンクレアは思いがけず授かった子どもと妻メタの面倒に時間を割かなければならず、自身の執筆活動が思うようにいなくなってしまったのである。「書くことが強迫観念となった作家」<sup>25)</sup> がその執筆時間を削られるとしたら、精神的に破綻することは間違いないだろう。

そうした生活から逃れるために構想したのが「ヘリコン・ホーム・コロニー」であったのだ。だが、世間一般はシンクレアを社会改革派として認識しているため、自ずと「ヘリコン・ホーム・コロニー」は理想的生活共同体を意識した「コミューン」であると期待されてしまったのだ。

#### 【註】

- 1) 永見七郎編『新しき村五十年』(埼玉, 財団法人新しき村, 1968年), 序文のためページ表記なし。
- 2) Upton Sinclair, *The Industrial Republic : A Study of the America of Ten Years Hence*. (1907. Connecticut : Hyperion Press Inc., 1976), p. 263.
- 3) Upton Sinclair, *op.cit.*, p. 267.
- 4) Upton Sinclair, *op.cit.*, p. 280.
- 5) E. Digby Baltzell, *The Protestant Establishment : Aristocracy & Caste in America*. (New Haven, Connecticut : Yale University Press, 1964), p. 123.
- 6) ボールツェルはクラブをカントリー・クラブとメトロポリタン・クラブの2つに分類しているが、ネルソン・W・アルドリッジ Jr. (Nelson W. Aldrich, Jr., 1935-) は『アメリカ上流階級はこうして作られる—オールド・マネーの肖像』(*Old Money : The Mythology of Wealth in America*, 1988) の中でヨット・クラブなども挙げている。
- 7) Upton Sinclair, *The Autobiography of Upton Sinclair*. (New York : Harcourt, Brace & World, Inc., 1962), p. 128.
- 8) E. Digby Baltzell, *op.cit.*, p. 213.
- 9) E. Digby Baltzell, *op.cit.*, p. 19.
- 10) E. Digby Baltzell, *op.cit.*, p. 124.
- 11) E. Digby Baltzell, *op.cit.*, p. 369.
- 12) E. Digby Baltzell, *op.cit.*, 363.
- 13) Upton Sinclair, *The Brass Check : A Study of American Journalism*. (California : Published by the author, 1920), p. 63.



- 124 アメリカ文化史におけるアプトン・シンクレアの「ヘリコン・ホーム・コロニー」
- 14) Upton Sinclair, *The Industrial Republic : A Study of the America of Ten Years Hence*. (1907. Connecticut : Hyperion Press Inc., 1976), p. 278.
  - 15) Upton Sinclair, *The Brass Check : A Study of American Journalism*. (California : Published by the author, 1920), p. 64.
  - 16) Upton Sinclair, *op.cit.*, p. 63.
  - 17) 太田三郎『叛逆の芸術家』(東京, 東京美術, 1972 年), p. 85.
  - 18) 太田三郎, 前掲書, p. 84.
  - 19) 筆者が武者の「新しき村」を訪ねた際, 全国をオートバイで旅している青年がシンパとして農業の手伝いをしていた。数泊させてもらうために労働でそのお返しをするというわけである。
  - 20) Upton Sinclair, *op.cit.*, p. 66.
  - 21) これにはシンクレアの思い違いがある。ハートマン自身はウォルト・ウィットマン (Walt Whitman, 1819-92) に知己を得て, あれこれ物を書いており, 出版物があったが, シンクレアはその事実をつかんでいなかったのである。
  - 22) Upton Sinclair, *op.cit.*, p. 64.
  - 23) Margaret Ann Brown, *Not Your Usual Boardinghouse Types Upton Sinclair's Helicon Home Colony, 1906-1907*. (Unpublished Ph. D. Dissertation, 1993), p. 7. エビスコパル派はユダヤ教徒について収入が高く, また大学卒業率が高い。その源流が, 南部大農園主の多くが所属していた英国国教会 (the Church of England [Anglican Church]) であったことを考慮すれば理解し得るところである。
  - 24) ネルソン・W・アルドリッジ Jr. 著, 猿谷要監修, 酒井常子訳『アメリカ上流階級はこうして作られる—オールド・マネーの肖像』(東京, 朝日新聞社, 1995 年), p. 114.
  - 25) Lawrence Kaplan, *A Utopia during the Progressive era : the Helicon Home Colony*. (*American Studies*, 25, No. 2, pp. 59-73, 1984), p. 61.
  - 26) 中田幸子『アプトン・シンクレア — 旗印は社会正義』(東京, 国書刊行会, 1996 年), p. 14.

## VI おわりに

『ジャングル』がベストセラーになったことで, それまでの経済的に苦しい状況から脱することができるだけの印税がシンクレアの手元に入ったが, シンクレアはそれを当面の個人的問題を解決するための試みに投資した。

「書くことが強迫観念となった作家」<sup>1)</sup>であるシンクレアにとって, 作品を書き続けることは自らの精神状態を安定させる方法だったのだ。シンクレアの作品に自費出版が目立つのは, 作品の内容が社会に与える影響が非常に強烈だと



ということもあるが、それ以上に書かなければ一瞬たりとも安定した精神状況ではいられないほどになっていたこともその一つの理由になるだろう。それは家庭を築いた後も同じことであった。四六時中、家族を含めた他者との親密な生活をせざるを得ず、自分のためだけに使っていた時間と労力が削られることになる。こうした生活にシンクレアは耐えられなかったのだ。自分たち夫婦の生活までも新聞に記事として掲載してしまうような、「書く」という行為を最優先させる人間であれば、そうした状況は耐えられないことであろう。

ましてや、思いがけず、望んでいなかった子どもを授かったとなれば、シンクレアの精神状態はどれほど不安定なものになっただろうか。だが同時にシンクレアは自身の幼少時代の記憶から、子どもと妻に自分と同じような経済的に、また精神的に苦しい状況を経験させてはならないと考えたのである。病気がちの子どもと、精神的にも肉体的にも破綻寸前に至った妻を抱えていたシンクレアは、自分の家族全員が互いに満足できる理想的な生活形態を構想したのだ。既に触れたことだが、そこには「共同の台所と食堂」<sup>2)</sup>が存在しなければならないのだ。つまりシンクレアが構想する理想的な生活形態には、家庭といえども、他者が介在しているということが条件なのである。他者が介在するとすれば「コミュニン」ということになるだろう。

この生活形態について、ジョージ・ワシントン大学でアメリカ文明論を講じたロバート・H・ウォーカー (Robert H. Walker) は、その著『アメリカ社会文化史』(*American Society*, 1980) において理想的な生活形態としての「実験的共同体」について、いくつかの例をあげながらユートピアや「コミュニン」という言葉を用いて、その意義を次のように解説している。

マザー・アンとシェイカー教徒、ジョージ・ラップとハーモニスト、ジョン・ハンフリー・ノイズとオナイダのパークションニスト、ロバート・デイル・オーウェンとニュー・ハーモニーの空想的社会主義者はこうした指導者と彼らの理想主義的実験の2、3の例にしか過ぎない。このような「人里離れたところに設けられるユートピア」には高尚な精

神的特徴がある。戦争と暴力を否定した。個人の財産は共同体の財産とした。参加者は長時間労働に従事し、祈りをあげ、また断食をした。ほとんどのコミューンが喫煙を禁じ、また強い酒を禁じた。多くのコミューンが性行為を禁じた。だがこれが参加者の自然増加を不可能にすることとなった。また時には言語の違いが近くに住む人たちを参加者として招くことへの障害となった。したがって創設者が亡くなると大方コミューンも消滅した。コミューンは継続している間、この時代を特徴づける熱烈で希望が満ちあふれるような雰囲気を表していただけでなく、同時に民主主義と共同体意識とを拡大する上で多くの有益な役割を果たした。<sup>3)</sup>

独身主義を貫いた特殊なものは別にして、宗教を土台にした「コミューン」を除けば、その多くは頓挫している。シンクレアはその轍を踏まぬ理想的生活形態を模索したのだ。それは男女の区別なく、専門職に没頭できる環境を実現することだった。シンクレアはマックレイカーとしての単なる社会改革を目指しただけではなく、自らの仕事にいそしめる生活環境を構築することを想定したのだ。

既に述べたことだが、シンクレアは社会における女性の地位について関心があり、ギルマンの『婦人と経済』を読んでいた。ギルマンは女性には経済的自立が不可欠であり、科学的管理法によって女性の真の自由が実現すると考えた。

シンクレアは一般社会の改革を想定しながら、自らが作家であり、夫であり、親であることのすべてを充足させられるような生活環境を提供することによって男性、女性の自立を叶えようとしたのだ。女性解放運動やフェミニズムが開花する半世紀も前に、既にシンクレアは極めて近代的な考えを抱いていたということになる。シンクレアの作品にその例を読み取ることが可能だ。

例えば『石油!』(*Oil*, 1927)における主人公バニー(Bunny)と労働運動に勤しむユダヤ人女性レイチェル(Rachel)との関係や、レイチェル自身の生

き方や、サッコ＝ヴァンゼッティ事件 (Sacco-Vanzetti Case) を題材にした作品『ボストン』(*Boston*, 1928) の主人公コーネリアの生き方にシンクレアは「新しい女性」(new woman) の姿を投影している。

シンクレアは自らが望む生き方、つまり妻や子どもから邪魔されることなく好きなように執筆活動ができる生活基盤を構築するだけでなく、自分と妻との関係、ひいては自分と同じような境遇にある男女や、その家族の生き方の理想的形態を実現するにあたって、どのような生活形態が最善なのかを模索したことだろう。先に述べたように、家庭に他者が介在するとすれば、その模索の範囲のなかに過去の「コミュン」を顧みることがあっただろうことは否定できない。またそれは「ヘリコン・ホーム・コロニー」という名称に現れている。IIで述べたように、「コロニー」とは芸術家など同業者の「集団居住地」という狭い意味でも用いられる言葉だからだ。アメリカのコミュン史を紐解くと、この言葉を用いた例が他にもあることがわかる。19世紀半ば、ウィスコンシン州にオーウェン派のトマス・ハント (Thomas Hunt) によって設けられた「平等コロニー」(Colony of Equality) である。21人ほどが集まって共同生活を始めたが、農場開拓の難しさに3年ほどで解散したという「コミュン」である。

「平等コロニー」は一つの例にしか過ぎないが、ホーソーが「ブルック・ファーム」に体験したように永続性のあるものは少ない。ウォーカーは「コミュン」の消滅を創始者の死と結びつける例を挙げているが、その多くは思想上の食い違いや人間のエゴによって崩壊しているのだ。そのためかシンクレアは、そうしたものによって崩壊しないような生活形態を模索したのだ。その結果が、当時盛んになっていたカントリー・クラブやメトロポリタン・クラブに準じた形態だったのだと言えよう。

シンクレアが構想した理想的生活形態の目的ときっかけが、極めて個人的な問題を解決するためのものだったためか、共に働き、そこから得る収入は共有し、また共に同じ質の生活を送るという「コミュン」らしい性格を備えていない「ヘリコン・ホーム・コロニー」は、いわゆる一般的な「コミュン」の

枠組みにはおよそあてはまらない組織になったとは言え、シンクレアと同じ人生を歩む人たちや専門職に就いている人たち、あるいはこれから就こうと考えている人たちにとっては革命的な生活形態を提示されたという印象が強かったのではないだろうか。

また、シンクレアが「ヘリコン・ホーム・コロニー」の加入条件として「相性」をあげていることについて、筆者は、「きわめて非客観的な基準で非常に不明確であり、またこれほど排他的な基準もないだろう」と述べたが、「ヘリコン・ホーム・コロニー」が宗教や特定の思想を土台にした生活共同体ではない限り、いかにして組織を存続させることが可能かということを考えると、「相性」は一つの重要な基準になりえる。したがって、シンクレアが自身にとって都合の良いメンバー、つまり同好の士だけを集めていたことは、恒久的な共同生活体を構築する上では当然のことと考えられるし、シンクレアの慎重さが見られるというものだ。

このように「ヘリコン・ホーム・コロニー」を捉えてくると、そこは、まさにシンクレア自身とその家族にとってだけでなく、多くの専門職に就いている人びとや、これから就こうとしている人びとその家族にとっても、ユートピアそのものになりえる場所であったと言える。

#### 【註】

- 1) Lawrence Kaplan, *A Utopia during the Progressive era : the Helicon Home Colony*. (*American Studies*, 25, No. 2, pp. 59-73, 1984), p. 61.
- 2) Upton Sinclair, *The Autobiography of Upton Sinclair*. (New York : Harcourt, Brace & World, Inc., 1962), p. 128.
- 3) Robert H. Walker, *American Society*. ( 1980. Tokyo : Nan'un-Do, 2004), p. 30.

#### 【参考文献】

Aldrich, Nelson W. Jr. *Old Money : The Mythology of Wealth in America*. New York : Allworth Press, 1988. (ネルソン・W・アルドリッジ Jr. 著、猿谷要監修、酒井常子訳『アメリカ上流階級はこうして作られる—オールド・マネーの肖像』(東京、朝日新聞社、1995年。))

- Baltzell, E. Digby. *The Protestant Establishment : Aristocracy & Caste in America*. New Haven, Connecticut : Yale University Press, 1964.
- Bercovitch, Sacvan. *The Cambridge History of American Literature, Volume Three, Prose Writing, 1860-1920*. Cambridge : Cambridge University Press, 2005.
- Brown, Margaret Ann. *Not Your Usual Boardinghouse Types Upton Sinclair's Helicon Home Colony, 1906-1907*. Unpublished Ph. D. Dissertation, 1993.
- Fogarty, Robert S. *Dictionary of American Communal and Utopian History*. Westport : Greenwood Press, 1980.
- Fried, Alfred. *The Rise and Fall of the Jewish Gangster in America*. New York : Holt, Rhinehart and Winston, 1980.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Blithedale Romance*. 1852. *The Blithedale Romance and Fanshawe*. Ohio : Ohio State University Press, 1964.
- Horwitz, Elinor Lander. *Communes in America : The Place Just Right*. Philadelphia and New York : J. B. Lippincott Company, 1972.
- Hostetler, John A. *Hutterite Society*. Baltimore and London : The Johns Hopkins University Press, 1997.
- Kanter, Rosabeth Moss. *Commitment and Community : Communes and Utopias in Sociological Perspectives*. Massachusetts : Harvard University Press, 1972.
- Kaplan, Lawrence. *A Utopia during the Progressive era : the Helicon Home Colony*. *American Studies*, 25, No. 2, pp. 59-73, 1984.
- Sinclair, Upton. *The Jungle*. 1906. New York : W. W. Norton & Company, Inc., 2003.
- . *The Industrial Republic : A Study of the America of Ten Years Hence*. 1907. Connecticut : Hyperion Press Inc., 1976.
- . *Love's Pilgrimage*. 1911. South Carolina : BiblioBazaar, 2007.
- . *The Brass Check : A Study of American Journalism*. California : Published by the author, 1920.
- . *The Autobiography of Upton Sinclair*. New York : Harcourt, Brace & World, Inc., 1962.
- Stockwell, Foster. *Encyclopedia of American Communes, 1663-1963*. North Carolina : McFarland's Company Inc., 1998.
- Sutton, Robert P. *Modern American Communes : A Dictionary*. Connecticut : Greenwood Press, 2005.
- Trahair, Richard C. S. *Utopia and Utopians : An [sic] Historical Dictionary*. London, England : Fitzroy Dearborn Publishers, 1999.
- Walker, Robert H. *American Society*. 1980. Tokyo : Nan'un-Do, 2004.
- 荒このみ編『史料で読むアメリカ文化史 2 独立から南北戦争まで 1770 年代—1850 年代』東京, 東京大学出版会, 2005 年.
- 池田智『アメリカにおけるユダヤ人コミュニオン』, *Humanitas*, 玉川大学学術研究所, 人文科学研究センター, 2010 年, pp. 52-74.
- 池田智, 中島祥子『「アメリカのコミュニオン辞典」編纂への試み』, 『論叢』第 48 号, 玉川大

- 学文学部, 2008 年, pp. 65-195.
- . 『コミュニーなぜアメリカに?』, 『論叢』第 49 号, 玉川大学文学部, 2009 年, pp. 55-88.
- 遠藤泰生編『史料で読むアメリカ文化史 1 植民地時代 15 世紀末—1770 年代』東京, 東京大学出版会, 2005 年.
- 太田三郎『叛逆の芸術家』東京, 東京美術, 1972 年.
- 越智道雄『アメリカ「60 年代」への旅』東京, 朝日新聞社, 1988 年.
- 斉藤真, 金関寿夫, 亀井俊介, 岡田泰男監修『アメリカを知る事典』東京, 平凡社, 1986 年.
- 中島祥子『アメリカにおけるコミュニーの系譜—「ヘリコン・ホーム・コロニー」理解への手がかりをもとめて』*A.P.O.C.S.* No.4, ポップカルチャー学会, 2007 年, pp. 47-60.
- . 『「口の中の敵」についての考察: アプトン・シンクレアの強い思い』, 『経営学紀要』第 18 巻第 1・2 合併号, 亜細亜大学短期大学部学術研究所, 2011 年, pp. 139-175.
- 中田幸子『アプトン・シンクレア—旗印は社会正義』東京, 国書刊行会, 1996 年.
- ゾルダン・ハラスティ著宇賀博編訳『ブルック・ファームの牧歌』東京, 恒星社厚生閣, 1991 年.
- 永見七郎編『新しき村五十年』埼玉, 財団法人新しき村, 1968 年.
- 村田充八『コミュニーと宗教——燈園・生駒・講』滋賀, 行路社, 1999 年.

## Reconsidering the Purpose of Upton Sinclair's Helicon Home Colony

by

Shoko Nakajima

This article is intended to revisit the purpose of Upton Sinclair's Helicon Home Colony founded in 1906, described as a commune in the *Dictionary of American Communal and Utopian History*. After further study, I've concluded that it is not a 'commune,' but rather a club or a hotel.

The word 'commune,' used since the 1960s, is defined as a group of people sharing religious beliefs or similar idealistic goals who organize their own self-sufficient community, usually in a rural area, where all the members live together. The members share responsibilities and work together to produce everything including the food and materials needed to survive. Economic, political and social activities are carried out cooperatively within the community.

Strong ties between the members are essential because member discord may lead to the group's disintegration.

Upton Sinclair planned Helicon Home Colony as a place where the members could devote themselves exclusively to their jobs without worrying about their chores like cooking and cleaning and even raising and educating their children. Sinclair intended to provide the place primarily for writers, artists, musicians, teachers and professionals. He proposed that salaried experts should be employed for housekeeping and taking care of children. Thus Helicon Home Colony has few features which are consistent with a definition of a 'commune.'

One probable reason why Upton Sinclair tried establishing Helicon Home Colony was because of his own personal problems. In 1900, he married Meta, a daughter of the Fuller family, longtime family friends. Although Upton wasn't financially able to support his family, Meta unexpectedly became pregnant and gave birth to a sickly son, David. She dedicated herself to raising David and maintaining the house alone, while her husband did his writing. For Meta, the result was poor physical and mental health and an attempted suicide. Her depression compelled Upton Sinclair to look after his wife, David, and the housework. Under these circumstances, Upton Sinclair developed the concept of Helicon Home Colony to manage his affairs smoothly, causing me to conclude that it is not a 'commune' but an organization similar to a club or a hotel.